

金剛頂蓮華部心軌に云く、次入妙觀察智定、縛印、置、跏趺上、進力相背、堅、頭、合、禪、智、相、拄、押、進、力、と。此は常の彌陀定印なり。他化自在天理趣會軌亦是に同じ。

大樂金剛薩埵軌に云く、無量壽如來赤色左拳慢執蓮華莖、以右開敷、と。此印相は、正觀音に同じく、勝初瑜伽軌是に同じ。觀自在菩薩最勝心明王經に曰く、先中央畫、菩提樹、樹下、畫、阿彌陀如來坐師子座、以二蓮承足、身金色、右手施無畏、と。不空羼索經第十五に云く、阿彌陀佛右手作摩頂相、と。佛說陀羅尼集經第二阿彌陀佛大思惟經說序分第一云く、結跏趺坐、手作阿彌陀佛說法印、左右大指無名指頭各相捻、以右大指無名指、壓左大指無名指頭、左右頭中指小指開、堅、と。是れ則ち同經所說阿彌陀佛輪印なり。此印相は、右の大指無名指を以て、左の大指無名指の頭を壓す、相明了ならず。兼意阿闍梨云く、左手作三鈷仰、安、臍、右手以無名指捻大指甲、覆左印上、云云。智吉祥の印の如し。

阿喇多羅陀羅尼阿嚧力經に云く、作說法印於蓮華臺、結跏趺坐、身純金色、作白焰光、と。以上は經軌所說の相なり。之れを括するに、法界定印と、妙觀察智定印と、說法印と、蓮華開敷の印と、右手施無畏印と、摩頂の相となり。身色は金色と赤色となり。

又大日經第六に云く、青、是、無、量、壽、色、と。補陀落海會の軌には、身相赤金色、丹光袈裟衣、と。又最勝心明王經には、坐白蓮華、とあり。

威得の尊に就いては、善光寺如來は左手刀印を仰けて下に垂れ、右手施無畏の印を爲り、又心覺阿闍梨の所傳と云ふ五尊曼荼羅の中尊には、法身說法の印を作し、又元興寺智光曼荼羅の彌陀は、合掌の印を爲し、當摩曼荼羅の中尊の彌陀は、三身即一の印を爲し、大原良忍上人及び惠心僧都來迎の彌陀は、左右の手、法身說法の印の如くして、右手を外に向けて堅て、左手與願の印の如く仰け垂れたり、其他種々の像あるべし。委しく擧ぐることはせず。

乙、印契の標幟

妙觀察智定印は、一傳に云く、左右の地水火の三指を又へ縛したるは、六道輪廻の結縛を標し、左右の風空二指を堅て、頭相ひ合せたるは、四智を標す。即ち六道の衆生に、四智菩提を證せしむるの意なりと。一傳に云く、左右の地水火を又へ縛したるは、貪(水指)、嗔(火指)、癡(地指)の三毒の結縛を標す。即ち貪、嗔、癡の三字に當る。風空相捻して二箇の圓點を作るは、戒の涅槃點を標す。即ち三毒を寂滅せしむるの意

にして、彌陀の種子の字の衆を結び顯すと。

法界定印は、胎藏大日の印なり、彌陀即ち大日の深旨を顯す。故に深祕の彌陀と云ふべし。

説法の印は、空水相捻して、マロラカにするは、法輪を顯す、故に轉法輪の印となり、此印を彌陀輪印と云ふ。地火風の三指を立つるは、三平等の義にして、輪の光焰を表す。水指は大悲なり。此大悲虚空の如く法界に周遍して、法輪を轉ずる義を顯すなり。又在手は定輪右手は智輪なり。兩手相合するは、定慧不二の法輪を表す。開蓮華印は、彌陀大願業の風を以て、一切衆生の心蓮華を開敷する義を表す。即ち四十八願の印なり。又因果不二を示して、其相觀音に同じ。但し五佛の寶冠を著すると、偏袒右肩せざると、結跏趺坐とを異りとす。

其他施無畏手を作り、或は摩頂の相をなす等は准じて知るべし。又身金色は、即無量壽の義を標す。赤色は四種法の色法に依て、増益門の敬愛の色を標す。紅蓮華を以て三摩耶形と爲すと對照して知るべし。又身の青色なるは、胎藏の色法に依る。青は虚空の色なり。西方は菩提門大空智の義を標す。白蓮を座とするは、

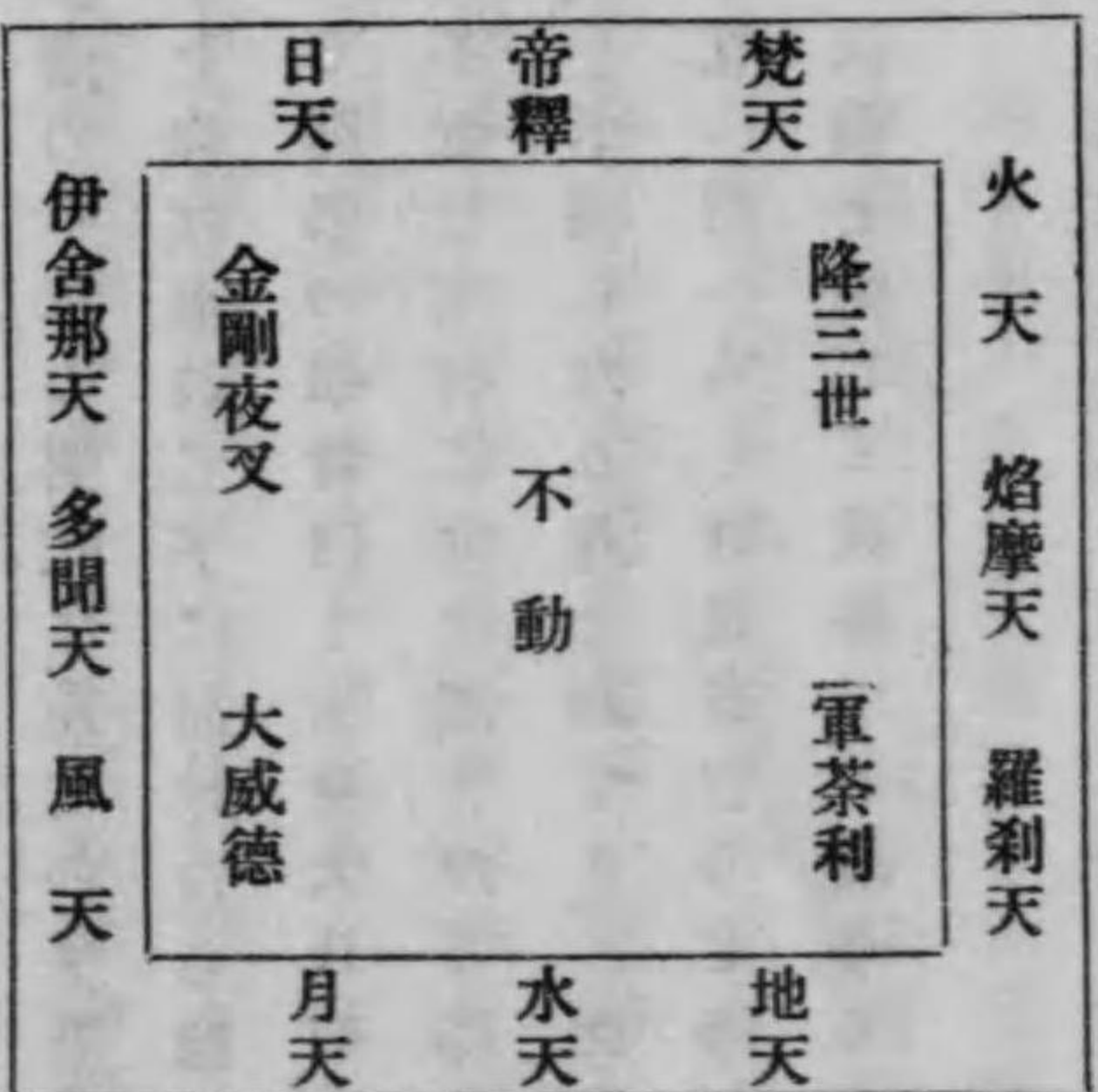
毘盧遮那本地の風光を標し、青蓮を座とするは、胎藏の色法に依り、金蓮を座とするは、本有の心蓮開敷の義を標し、雙蓮各別に左右の足を承くるは、定慧の二蓮を標す等なり。又惠心僧都來迎の中尊の彌陀は、左右の手各風空相捻して輪印に作り、右手を豎て上に向け、左手を仰け垂れて下に向けたる像は、即眞宗及び淨土西山派等の本尊なり、之れに就いて眞宗の學者曰く、法身大日如來の印は無所不至の印なり、阿彌陀の印は此の無所不至を左右に分け開きたる印にして、即ち法性法身の大日より、方便法身の阿彌陀を示現したる義を顯すと。此説は曇鸞大師の往生論註に依て釋する義なり。余私に謂へらく、妙觀察智の定印を分開して、上は三善道に對し、下は三惡道に對して、法輪を轉じて救濟する義なるべし。更に天台横川の阿闍梨に問ふべし。

又善光寺如來の印相は、此像たる、東晋の竺難提の譯する請觀音消伏毒害陀羅尼經に説く所の聖像にして、釋尊在世の時、印度毘舍離國に惡疫鬼病流行の際、月蓋長者の請求に由りて、示現する所の、一光三尊の眞佛を寫し鑄たる像なる故に、刀印は惡疫鬼病を對治して、病苦を截斷する義を表し、施無畏の手は、無畏の樂を與ふる義

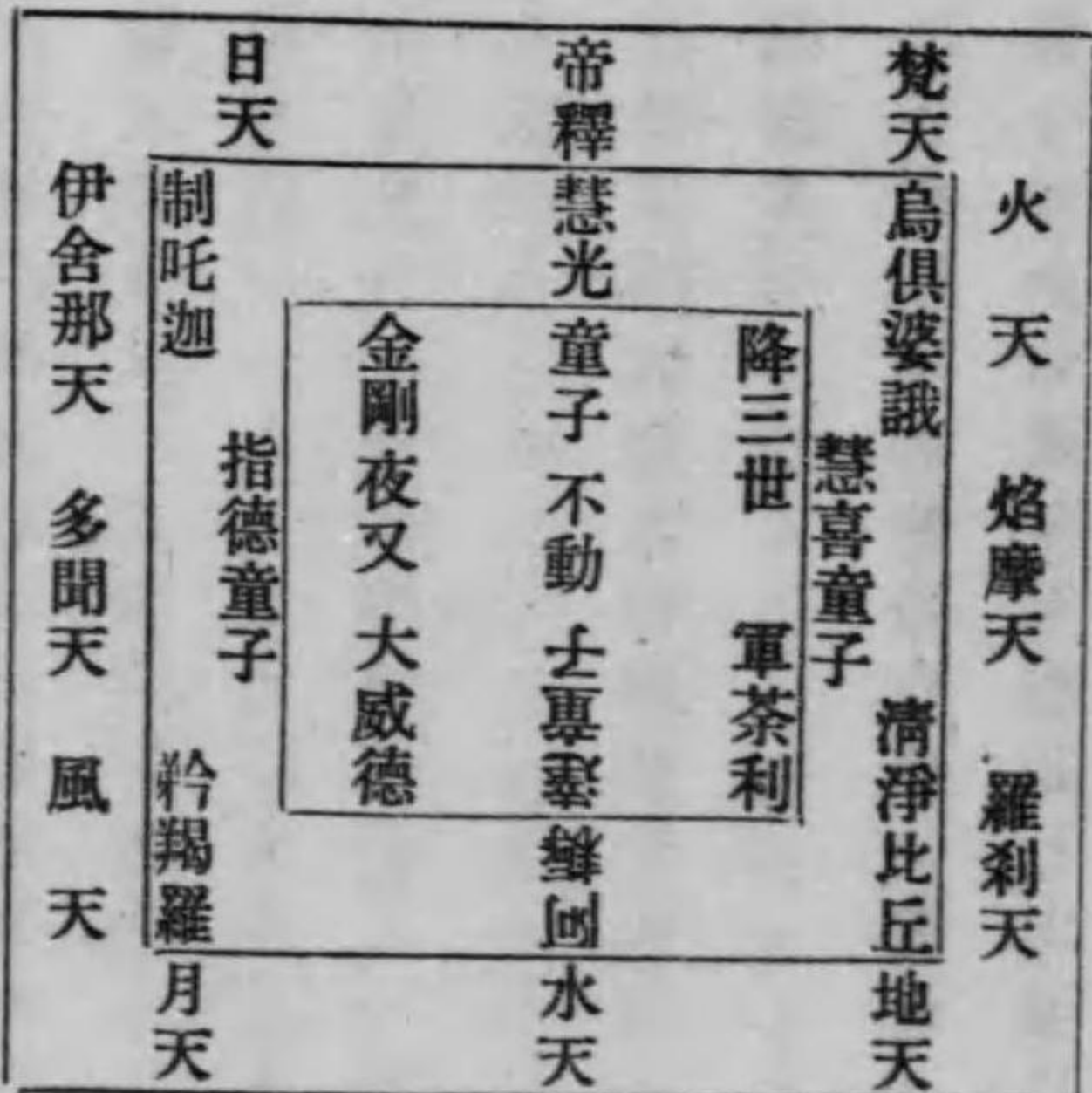
を表す。即ち拔苦與樂の義なり。是善光寺の相承として傳ふる所なり。

二、不動明王曼荼羅

(イ) 舊圖様



(ロ) 新圖様



八大童子法に云く、令書本尊與八童子云云。

密教綱要畢

密教十回講義記録

東京帝國大學文科大學に於て、大正五年二月十九日より、毎週一回、權田大僧正を請じて、密教講義を公開し、同年六月三日に至るまで、前後十一回を以て講了せり。聽講者は、帝國大學教授、助教授、講師、及び史料編纂局職員等十數名、帝國大學卒業生、及び學生五十一名、國學院大學より一名、曹洞宗大學より七名、天台宗大學より十名、宗教大學より十名、早稻田大學より九名、日蓮宗大學より十四名、東洋大學より六名、美術學校より一名、大學卒業生二名、帝國博物館より一名等なりき。

第一日 二月十九日

聽衆百十五名

まづ、文學博士藤岡勝二氏は、講演公開の趣意を述べて、權田大僧正を紹介し、權田大僧正、徐に席に就いて開講す。

序説として、密教の用語の説明中、顯密の意義に就いて、空海、安然、杲實の判釋を述べ、一法界多法界の語に關して、金胎兩部を概説し、本論に入りて、印度の相承を説く。

第二日 二月廿六日

聽衆百廿七名

大日經、金剛頂經、瑜祇經の説相の概要を示し、支那の善無畏、金剛智以前に行はれたる、求那跋陀羅等の密教を解説し、進んで、雜部密教との別を明かし、日本古代に於て、密教と名づくべきもの、即ち役小角、婆羅門僧正、道慈律師等の所宗に就いて、解説を試み、これ等は、未だ密教の全般を傳ふるものにあらず、阿闍梨の面前に於て、現前に傳法灌頂をうけて歸朝せる、寂澄、義真、圓仁、圓珍等、台密及び空海、常曉、圓行、宗叡、惠運等（東密）の諸師の傳に於て、始めて完全せる密教の面目ありとし、上述の諸師に就いて、一々にその傳統を述べ、更に、空海の相承に關して、血脈の等葉不等葉の別及びその緣由を説く。

第三日 三月四日

聽衆百廿八名

大日經に、廣略の三本あり。一は、法爾常恒の説法にして無盡、二は分流の廣本十萬頌、三は分流の略本三千頌なりと説き、一々に就いて、幽玄なる教理と相應せる解説を加へ、經の説處、對告の機を述べ、現今藏經中の、大日經、金剛頂經、及び諸儀軌の出處に及ぶ。

第四日 三月十一日

聽衆約百名

密教の教相判釋に關して、先づ、台密諸師の顯密二教觀を論じ、圓仁に始まり、圓珍、安然の説を述べ、證眞に終る。次に、空海の十個の住心を説きて、第一住異生、羝、羊心より、第十住秘密莊嚴心に終る。

第五日 四月廿二日

聽衆約百名

十住心の判釋に關して、現今、我國に存在せる、一切の宗旨を判釋して、餘蘊なき見地を發露せり。即ち、基督教を以て、第三の住心嬰童無畏に攝し、三乘禪を貶し、一乘禪を以て、一如本覺を教ふるものとして、第九の住心極無自性心に攝入し、融通念佛宗の事々無礙法門に關しては、勿論第九の住心を許し、淨土教宗を論じては、一見第七の住心覺心不生心に入るべきが如くなれども、極惡の凡夫が、化身の佛を見、化土に往生するを得るにあらず、直に念佛の願に乗じて、報土に往生し、報身の彌陀を見るを得るといふに至りては、その意最極至高の密教と等しとし、一方淨土教は、即身の成佛を説かず、順次の往生を説く邊に約して、一應第九の住心に攝在すべきを續説し、日蓮宗を説きて、第八の住心に攝入して講を結ぶ。

第六日 四月二十九日

聽衆約百名

六大緣起を説くに當りて、小乘唯識宗、三論宗、起信論、天台宗、華嚴宗の緣起説より、密教の教理に論及し、六大に生滅なし、本來常住不生不滅の毘盧遮那佛なり、法に約すれば、六大、人に約すれば、大日、六大無礙、常瑜伽法界を極意とすと論じ、六大の一々に就いて説明を加ふ。次に、四曼三密に關して、大三法羯の一々の曼荼羅を説き、この各の曼荼羅の三密を説明す。次に、心法と色法とを論じ、進んで、即身成佛の深意を説く。曰く、成佛に三種あり、理具、加持、顯得と。本有本覺の菩提心は理具なり、圓覺經に衆生本來成佛と。因位の時、如說修行すれば、本尊の三密の加持力によりて、自身本尊となる、これ加持成佛なり。大疏に、能令三藏、同於本尊と。即ち觀成就すれば、行住坐臥に自身本尊たるなりと。顯得とは、心内の曼荼羅の顯現なり、理具の菩提心を、全く顯現したる姿なりと。

第七日 五月六日

聽衆九十二名

密教所化の機に、結緣と正所被とあり、謗法の者に至るまで、當機にあらざるなし。正所被の機は、正しく密教を信受する者なり。正所被の機に、又、迂回の機と、直往の機とあり。直往中、又、普門大機と一門小機とあり。普門大機中、又、利鈍の別ありと。

往生淨土の項目に關して、現身往生と順次往生とを細説し、淨土教と密教との異見を提出し、彌陀の報土に往生するを、方便引入の法門とす。非情成佛の項に、三論、法華、華嚴を擧げて、その理談に走るを難じ、密教が萬有を、六大所成と説くに於ては、有情非情に別異あるべからず、心法色法、たゞ表裏のみ、故に非情も發心修行して成佛するを得と。而して非情成佛の相は、即ち三昧耶曼荼羅なりと結ぶ。次に變成男子の論に入りて、法華經の龍女成佛、無量壽經の變成男子の願を擧げ、密教獨り女人成佛を許す、これ顯教は、隨他意の法門にして、密教は獨り隨自意の法門なる故、如來内證の眞髓を示すなりと。繪木法然の項に於て、小乘の偶像的なるを排し、大乘は自心の所變なりとして、不可思議の功德を認めざるを笑ふ。

第八日 五月十三日

聽衆約百名

事相に關する異點より、野澤二流の末流、十二流の分流の原因を説き、一多界を、金胎兩部に配し、流祖に就いて、各々の相承の表裏と、極秘の印契に暗示を與へ、轉じて台密十三流の分流に及ぶ。次に灌頂に關して、結緣灌頂、受職灌頂等、及び印法灌頂、事業灌頂、以心灌頂を擧げ、修法に就いて、息災、增益、降伏、敬愛、鈎召の五種法を説く。

第九日 五月二十日

聽衆約百名

先づ、阿字月輪觀の修式を、細目に亘りて説き、觀門が、如實自知心にあるを教へ、月輪連華、輕霧に就いて、一々に教相と關連せる深旨を説き、阿字に淺深の三釋あるを示し、觀法の障礙は、煩悶なれども、その煩悶を斷ずることのみが觀門の目的ならず、釋論に、然此中斷、不捨無明、非以斷治爲斷と説きたるは、その至極の理なり。正信偈に、不斷煩惱得涅槃と説く、蓋し、此の意なりと斷定せり。次に、五種三味道を表示し、修法の大事なる事理供養に入り、印契、供具に就いて、一々淺深の義を説く。

第十日 五月二十七日

聽衆約百名

五相成身は、即身成佛、頓證菩提の觀門にして、祕密の法なり。これ成佛の作法なりとて、通達菩提心の淺觀より、修菩提心、成金剛心、證金剛身の深門に及び、佛身圓滿の觀門に於て、自身即大日如來等の羯磨身と成ると觀じ、成佛究竟する深秘の境界に説き及ぶ。五字嚴身觀に於て、行者が、身上に孔(く)く(く)の五字を敷きて、自身、毘盧遮那と觀ずべきを説き、三種菩提心の項に、菩提心論を引きて、勝義心、行願心、三摩地心を説く。次に、曼荼羅に入り、普門と一門との別を明かし、現圖曼荼羅の作者を

論じ、惠果阿闍梨が特に、弘法大師の爲に、製作せるものなりと断定す。

第十一日 六月三日

聴衆八十三名

先づ、大日經所説の諸種の曼荼羅を説き、白壇九會曼荼羅は、前方便の三摩耶支分生曼荼羅は、祕々中の極祕、嘉會壇曼荼羅は、淺意、祕密曼荼羅品の曼荼羅は、深祕、蓮華成曼荼羅は、極祕中の祕なりと判じ、兩部曼荼羅の一々の名目、及び諸尊に就いて、概略の説を試み、諸尊曼荼羅に於て、淨土曼荼羅、地獄曼荼羅等を説き、最後に護摩に就いて、外道の護摩との別、及び内護摩、外護摩の解を與へて講了す。

藤岡博士立つて、講師及び聴講者に對し、一場の挨拶をなし、期待以上の好成績を收めて、この密教講義は満講となれり。

大正五年七月 帝國大學梵文學研究室に於て 和田 徹 城記

大正五年十二月一日印刷
大正五年十二月五日發行

(正價一圓五十錢)



發行所

東京市小石川區高島六丁目二六〇八六

丙午出版社

印刷所

株式會社秀英舎

印刷者

佐久間 衡治

發行者

高島 大圓

著者

權田 雷斧

11
217

佛學辭典	實習梵語學	印度宗教哲學史	印度六派哲學	巴利語文典	悉曇阿彌陀經	曼荼羅通解	密教法具便覽
定價十二元	定價八元	定價十二元	定價十二元	定價八元	定價八元	定價八元	定價八元
近刊							

終